

# 独居高齢者居宅への対話ボランティア訪問の意味

——リスナーボランティアグループ「りすの会」の実践を事例として——

○高齢者住宅研究所 竹内みちる  
京都光華女子大学 鮫島輝美

1 目的：独居高齢者の「疎外感」「孤独感」の解消を目的とする支援活動の一つに、「話し相手」のボランティアがある。保科・奥野（2008）は、話し相手ボランティア活動は、在宅高齢者に対して、「①情緒的サポート機能、②見守り・安否確認機能、③閉じこもり防止機能、④生活意欲の向上機能、⑤介護保険サービスの一部代替機能」という諸機能を果たしていると指摘する。本報告の目的は、実際の話し相手ボランティアの活動の事例から、居宅へ訪問することの積極的な意味を、より具体的に提示することにある。

2 方法：本研究は、上述した話し相手ボランティアが居宅へ訪問することの積極的な意義を検討するために、在宅医療の経験豊富な O 医師を代表者とする、独居高齢者を対象にしたリスナーボランティアグループである「りすの会」の実践を事例として取り上げる。りすの会は、2008 年 3 月より活動準備を開始し、2013 年 5 月末段階で、利用者 35 名、延べ訪問回数 573 回、延べボランティア動員数 1324 名の団体である。本研究は、当事者と研究者の共同実践によるアクションリサーチ（矢守 2008 :164-7）を採用している。発表者たちは、2009 年 4 月の組織作りの準備段階からメンバーとして参加し、月に一度のボランティアミーティングへの参与観察とボランティアに対するインタビューにより、訪問エピソードを収集した。

3 結果：話し相手ボランティアが独居高齢者宅に訪問することの積極的な意味を事例を挙げて記述する。

事例：85 歳，男性，独居，ヘルパー介入，M氏の事例（ボランティアHの語り）

M氏は、要介護の妻を自宅で介護して数年前に最期を自宅で看取った。自宅には妻と過ごした日々の思い出が一杯あった。ある日、妻の仏壇の前で「おかあちゃん（妻）は、私のために一生懸命やった。贅沢一つ言わずに節約の生活をしてくれた。お陰で子供達が家を建てる時に援助したることもできた。おかあちゃんが『私が逝った時には、この箱を開けてな』言うてたから、その時が来て開けたら葬式代が現金で入っていた。こんなこと人に話すのは初めてや」と語ってくれた。いつも私たちに語ることで妻との思い出を深めていた。そんなM氏は、必ず私たちに到着前から玄関で出迎え、いつも決まったカステラとお茶でもてなしてくれた。「このカステラは近くのスーパーに歩くリハビリやと思うて買ってくるんですわ。これが楽しみなんですわ」と笑顔で答えてくれた。

4 結論：事例から、話し相手ボランティアが独居高齢者宅に訪問することの積極的な意味を以下 2 点指摘できる。①在宅とは、「私たちとむすびついて濃密に意味が集積した場所」すなわち、生活史的な意味表象の充満した場所（トポス）であり、そのような場所にボランティアが訪問することで、居宅に充満する生活史的な意味表象が利用者に再認識される機会となる場合がある。②ボランティアが訪問することで、居住者は、ケアの対象という受け手ではなく、主体的に自宅と言う環境の中で「もてなす」という役割を担うことができる場合がある。

文献

保科寧子・奥野英子，2008，「在宅高齢者を対象として対話や交流を行うボランティアの機能分析——話し相手ボランティアの事例分析から」『社会福祉学』 49(2) : 111-122.

矢守克也，2010，『アクションリサーチ——実践する人間科学』新曜社。